

研究室めぐり(1)

人類学教室所蔵の重要文化財

埴原和郎(人類)

昨年6月、E. S. モース教授が日本で最初に発掘した大森貝塚の出土品、ならびに本郷弥生町出土の弥生式土器の基準標本が重要文化財に指定され、本教室の保管する重要文化財はこれで6点をかぞえることになった。

この機会に、それらをごく簡単にご紹介してみた

い。

1. 銅ほこの鋳型

昭和30年6月22日指定。福岡県遠賀郡岡島村大字吉木出土。弥生時代の青銅製のほこを鋳造するための鋳型。明治30年ころ、福岡県宗像郡奴山村の法華寺住職が附近の農民より手に入れたものだが、本教



图1. 土 面

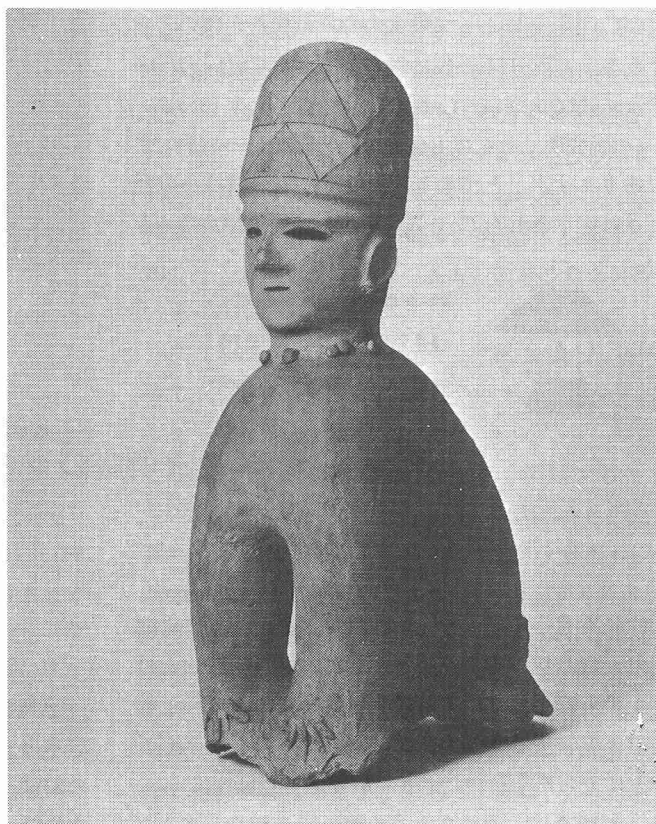


图2. 埴輪男子跪坐像
(講談社「古代史発掘」より転載)

室に保管されるようになった経路は不明である。

2. 土 面 (図 1)

昭和32年2月19日指定。

秋田県北秋田郡鷹巣町麻生出土。

明治30年12月人類学教室員大野延太郎氏がこの地方に出張した際、現地の小笠原為吉氏より“献納”されたものである。直径14cmの円形の輪廓をもち、目と口は大きく、顔の周囲に縄文をほどこしてある。これは縄文時代晩期に特有にみられる雲形文様の擦消し縄文で、この時代、東北地方の土面にみられる独特の顔つきをしている。

3. 埴輪男子跪坐像 (図 2)

昭和33年2月8日指定。

茨城県鹿島郡鉾田町青柳字不二内出土。

高さ54cm(台部は欠損)、無縁の帽子をかぶり、首飾りをつけ、両手を前について一見こま犬のよう

なかつこうをしている。両頬は赤色顔料によって彩色されている。

4. 埴輪女子像

昭和33年2月8日指定。

栃木県宇都宮市雀宮町小字十里杵塚出土。

明治28年3月ごろ、鉄道工事中に発見された。高さ58cmで丸首・裾広がりの衣服をつけ、両手を腰にあてている。後頭部に円板状の後光のようなものがつけられているが、これは結髪したまげを形どったものと考えられている。両頬には赤い彩色がほどこされていたが、現在はとれてしまっている。

5. 大森貝塚出土品

昭和50年6月12日指定。

明治10年9月、前記のようにモース教授およびその門下生によって発掘されたもので、土器類16個、石器その他12個をはじめ、土器破片、人骨、獣骨、

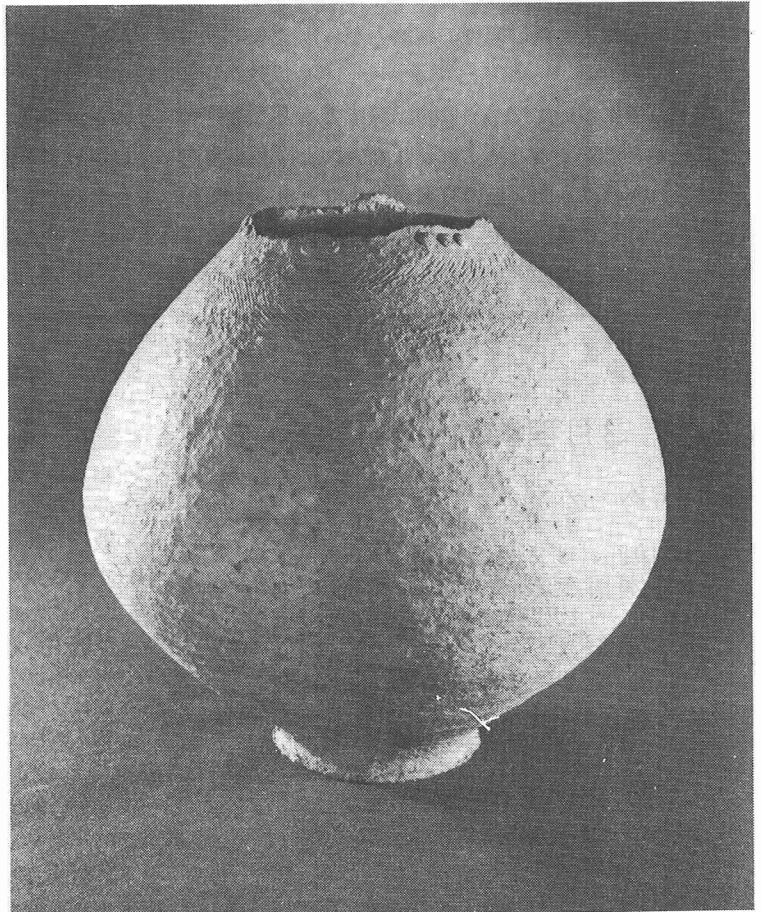


図 3. 弥生式土器

貝類などが一括指定された。いうまでもなく、これらはわが国における最初の組織的発掘による発見物であり、日本の人類学・先史学史上重要な標本である。

なお大森貝塚の場所については、現在二つの説がある。お気づきの方も多いと思うが、国電の品川駅と大森駅との中間の山の手より二つの碑が立っている。いずれも地元ではわが方が正しいとゆずらないようであるが、今現地には貝塚のあともなく、どちらに軍配をあげてよいかわからない、というのが実状である。

6. 弥生式土器 (図3)

昭和50年6月12日指定。

明治17年、大学予備門生徒・有坂鋁蔵氏(後に工学部教授)によって発見された。胴のふくらみの大きい単純なかたちの壺であるが縄文がまったくなく製作の手法も縄文式土器とは大きくことなっている。いわゆる弥生式文化の研究の端緒となった標本である。

発見場所については、当時の記録によると「向ヶ丘貝塚」となっている。これが「弥生式土器」と名づけられたのは、向ヶ丘の町名が弥生町となったためである。この場所は眼下に根津の町並みを見下し谷のかなたに上野の森を望む所とされているが、長

い間はっきりとはわからなかった。昭和20年代の終りころ、人類学教室で農学部の南側を発掘したことがあるが、このときも「向ヶ丘貝塚」の場所はわからなかった。ところが、昨年偶然のことから、現在の工学部9号館(浅野地区)の横から土器片が出るのがわかり、考古学教室によって発掘調査された結果、この場所こそ「向ヶ丘貝塚」であることが確認された。近く「弥生町二丁目遺跡」として、史蹟の指定をうけるはこびとなっている。したがって本学構内には、史蹟も一つ加わることになったわけである。

以上のほか、本教室には重要美術品の指定をうけた埴輪もあり、また近く指定をうける公算の大きい標本もいくつかある。これらの標本は現在、本学資料館4階の人類・先史部門に保管されているが、このガラス・ケースは昨年、植村前学部長ならびに佐佐木前会計委員長のお骨折りで作られたものである。

人類学教室ではこれらの貴重な標本の保管責任を負っているので、不慮の事故をふせぐために“公開”というかたちはとっていない。

しかし、ご希望があれば喜んでごらんいただくつもりなので、おついでの折にでも資料館にお立ち寄りいただければ幸いである。